

万葉集2167番歌の解釈と「片聞く」の語義について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the 2167th Poem and the Meaning of the Expression “Katakiku” in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集2167番歌「秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞濫香 片聞吾妹」には二つの問題点がある。一つは、第四句「音聞濫香」の「濫」の訓読に関して、現在推量「らむ」として訓む説と、「濫」を「監」の誤字と見なして過去推量「けむ」に訓む説の二つの説があることである。もう一つは、結句「片聞吾妹」の「片聞」の訓読と解釈に関するもので、訓読については、連体形として「かた聞く」と訓む説と、命令形として「かた聞け」と訓む説の二つがあり、解釈についても、前者は「一人で聞く」あるいは「半ばにしか聞かない（中途半端に聞く）」、後者は「よく（ひたすら）聞きなさい」と二つの解釈に分かれていることである。

本論文では、第四句の「濫」を原文どおり「らむ」と訓み、結句の「片聞」を「かた聞く」と連体形として訓み、「片聞」の意味を「片耳を澄ましてひたすら聞く」の意に解する新しい説を提案する。そして「かた聞く」が「片聞」と表記されている理由として、我々はかすかな音を聞こうとするときにしばしば「片耳」に手を当てて集音器の役目をさせ注意力を集中して聞こうとするが、この様子を文字で表現したのが「片聞」であると考えられる。

1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集2167番歌は「詠鳥」と題する二首のうちのひとつである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本にしたがって掲載しよう[1]。この本では原文第四句の「濫」が「監」に改訂されているが（理由については次節を参考）、この改訂の正当性については議論があり、後に重要なポイントとなるので改訂前の底本（西本願寺本）の原文も合わせて掲載しておく。

10/2167 秋の野の 尾花が末^{うれ}に 鳴くもずの 声聞きけむか 片聞^{わさも}け我妹

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞監香 片聞吾妹

【底本原文】秋野之 草花我末 鳴舌百鳥 音聞濫香 片聞吾妹

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

ここでもう一つの改訂について言及しておこう。上の底本原文にある「舌百鳥」は野鳥「モズ」の名前である。この鳥の名前は、漢籍や日本書紀などでは「百舌鳥」と表記されるが、底本原文では「舌百鳥」と表記され、「舌」と「百」の順序が逆になっている。これは歌の作者が誤って書いたものか、あるいは写本の際に誤写されたものかわからないが、いずれにしろ「舌百鳥」がモズを表わすことは疑いなく、「舌百鳥」を一般的な表記「百舌鳥」に改訂することについては特に問題はない。実際、すべての万葉集テキストにおいてこの改訂が行なわれている。しかし、この改訂と「濫」を「監」に改訂することとは次元の異なる話である。これについては第3節で詳しく検討する。

2. 先行研究

代表的な万葉集注釈書の解釈を見るために、それぞれの原文、訓読文、注釈、歌の大意を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

2. 1 新日本古典文学大系の解釈^[1]

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞監香 片聞吾妹

【訓読文】秋の野の 尾花^{うれ}が末に 鳴くもずの 声聞きけむか 片聞^{わさも}け我妹

【注釈】第四句の原文、西本願寺本以下の諸本に「音聞濫香」。これによれば、訓みは「声聞くらむか」。元暦校本・類聚古集・紀州本は、「音聞監香」。後者の本文を尊重して、「声聞きけむか」と訓む。「片聞く」は、「片待つ」（二〇九三）と同様に、ひらすら聞くの意であろう。

【大意】秋の野の尾花の穂先に鳴くモズの声を聞いただけろうか。よく聞きなさい、妻よ。

2. 2 新編日本古典文学全集の解釈^[2]

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞監香 片聞吾妹

【訓読文】秋の野の 尾花^{をばな}が末^{うれ}に 鳴くもずの 声^{こゑ}聞きけむか 片聞^{かたき}け我妹^{わさも}

【注釈】尾花—原文「草花」はカヤの花の意で書いた。万葉集ではカヤを「草」と書くのが例。

○声聞きけむか—原文は底本に「音聞濫香」とあり、コエキラムカと読まれている。元暦校本なども訓は同じだが、原文は「音聞監香」に作っている。恐らく「監」とあるのが古い形で、「濫」は訓によって意改された本文であろう。意味の上からも、第五句が呼びかけであることを考慮して回想のケムのほうが自然。○片聞け—このカタは、ひたすら、の意か。

【大意】秋の野の 尾花の穂先に 鳴くもずの 声を聞いたかね ようくお聞きよおまえ

2. 3 講談社文庫（中西進）の解釈^[3]

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞濫香 片聞吾妹

【訓読文】秋の野の 尾花^{をばな}が末^{うれ}に 鳴く^ももず^ずの 声^{こゑ}聞きけむか 片聞^{かたき}く我妹^{わさも}

【注釈】尾花が末—ススキの穂の先。伸びる先端をウレという。○百舌鳥の声—喧しい声。原文、底本に「舌百鳥」。類による。○四、五句、諸訓諸説ある。全注釈による。わが言をあまり聞かない吾妹。

【大意】秋の野の尾花の先に鳴く百舌鳥の声は、さすがに聞いただけろうか。私のいうことは半ばにしか聞かない吾妹よ。

2. 4 日本古典文学大系の解釈^[4]

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞濫香 片聞吾妹

【訓読文】秋の野の 尾花が末に 鳴く百舌鳥の 声聞くらむか 片聞く我妹

【注釈】尾花が末一尾花の穂先。○百舌鳥——八九七注。○片聞く一ひとり聞く。→補注。

【補注】カタとはマ（両）に対する言葉である。マとは二つ一組のものの双方がそろっていることであるに対し、カタとはその一方を指す。従って、それは一つの意味にもなるが、同時に不十分の意味を持つ。一方的という意味では、片思ヒ・片恋ヒ・片敷ク・片就ク・片寄ルなどがあり、その他に、片糸・片枝・片塚・片山・片岡・片緒などがある。不十分の意では、片生ヒがある。片聞クという例はこの歌以外に例がないが、二人で共に聞かず一人で聞く意であろうと思われる。片待ツという動詞は、ひとり待つ意から、さらに、ひたすら待つ意へと移って行ったものとも考えられる。

【大意】秋の野の尾花の先あたりで鳴く百舌鳥の声を、今頃聞いているであろうか。一人聞いている吾妹は。

2. 5 萬葉集註釈（澤瀉久孝）の解釈^[5]

【原文】秋野之 草花我末 鳴百舌鳥 音聞濫香 片聞吾妹

【訓読文】秋の野の 尾花が末に 鳴く百舌鳥の 声聞くらむか 片聞け我妹

【注釈】尾花が末に鳴く百舌鳥の一「草花」をヲバナと訓むこと前（8・1572）にあつた。童蒙抄にウレニとしたが、尾花にはスエと訓むこと前（2110、8・1577）に述べた。「百舌」は類（7・184）、京（左に緒）による。元、紀その外「舌百」に誤る。百舌鳥は既述（1897）。

○声聞くらむか一「濫」の字、元、類、紀に「監」に誤る。「監」であればケムであり、諸本すべてラムとあり、西以後「濫」とあるによる。

○かた聞け吾妹一紀、西などカタキクを、管見にカタキケとし「片はしをきけといふ也ト云々。案ずるに、片は助詞也。只きけといふ由なるべし」と云つたが、代匠記にも「カタキケと改タムベシ。其故ハ音聞ラムカトハ聞モキカズモイマダ知ラム詞ナルニ、何ソ忽ニ決定シテカタキクト云ベキ。互ニ奪ヒテ両ツナガラ失ナヒテ上下共ニ理ナシ。片聞ハ片待等ノ如シ」といひ、略解には「宣長云、片聞は片待の誤歟と言へり。いかさまにも片聞といふ事有べくもなし。片まつわぎもは、吾を下待をる妹と言ふなるべし」とある。全注釈には「カタは、動詞に接続して、その不完全な動作であることを現す。片思ふ、片敷くの類である。カタキクは、十分に聞かない、不完全に聞く意」といひ、「百舌鳥のやうなやかましい鳥の声を、果して聞いてゐるのだろうかというのが主旨である。片聞く吾妹は、悪口を言つたので、自分のいふことなどは、ろくに耳にもしないがの意である。諧謔性を有つている歌で、痛快な揶揄である」とあるが、「片聞く吾妹」をそこまで解するのは少し無理であろう。古典大系本補注に「二人で共に聞かず一人で聞く意であろうと思われる」とあるが、むしろ代匠記のカタキケと訓むに従ひ、「片待」（1900、7・1200、9・1703）の「片」と同じくひたすらに聞くがよい、と解すべきではなからうか。

【大意】秋の野の、尾花の穂先に鳴く百舌鳥の声を聞いてゐる事であろうか。ひたすらに聞くがよい。

3. 先行研究における問題点

まず始めに2167番歌の第四句の問題点について検討しよう。第四句の原文は底本（西本願寺本）では「音聞濫香」となっているが、最近出版された新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集の注釈書では「濫」を「監」に改訂して「声聞きけむか」と訓んでいる（2. 1節と2. 2節を参照）。すなわち、「濫」は本来現在推量の助動詞「らむ」として訓まれるべきであるが、これを「監」と原文改訂して過去推量の助動

詞「けむ」として訓んでいる。この改訂の理由として新編日本古典文学全集は注釈で次のように述べている。

原文は底本に「音聞濫香」とあり、コエキクラムカと読まれている。元暦校本なども訓は同じだが、原文は「音聞監香」に作っている。恐らく「監」とあるのが古い形で、「濫」は訓によって意改された本文であろう。意味の上からも、第五句が呼びかけであることを考慮して回想のケムのほうが自然。

しかしこの説明には問題がある。上の説明では、平安時代中期の書写とされる元暦校本では訓は「らむ」だが原文は「監」となっているから、原文としては「監」の方が古い形で、西本願寺本（鎌倉時代末期の書写）を初めとする後世の諸本に見られる「濫」は元暦校本に見られる訓「らむ」に引きずられて意図的に改訂されたものだろう、と推測している。ところが実際にはその逆で、元暦校本で訓が「らむ」、原文が「監」となっているという事実は、古い形は「濫」であったが元暦校本あるいはその親本において「監」と誤写された可能性を示唆していると考えべきである。というのは、そもそも万葉集は本来すべて漢字だけで表記されていたのであり、元暦校本に「らむ」という訓が付けられている以上、元暦校本あるいはその親本の原文に「濫」という表記があったことは事実として認めざるを得ないからである。このことは、万葉集中におけるすべての「濫」と「監」の用例を調べてみれば明らかになる。以下に結論を示す。

- ①「濫」の用例は全部で12例あるがすべて「らむ」と訓まれている（当該歌2167は除く）。
- ②「監」の用例は全部で10例あるが、「けむ」が8例、「み（見）」が1例、「かがみ」（「模範」の意）が1例である（難訓歌156は除く）。

上の結論②から、もし本来の原文が「監」であったならば「らむ」という訓みが生じる可能性は限りなくゼロに近い。また、結論①から、もし原文が「濫」であったならば訓みが「らむ」となるのはほぼ確実である。したがって、元暦校本において「らむ」という訓が付いているという事実は、元暦校本以前の原文に「濫」という字が書かれているのを誰か見た人がいることを証言している。

だとすれば、新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集のように、元暦校本の原文に「監」とあるからという理由で底本（西本願寺本）の「濫」を捨てて「監」を採用するのは問題であろう。実は、この二つの注釈書においては結句の原文「片聞吾妹」を「片聞け我妹」と命令形に訓むが、このように結句を命令形に訓む限り、第四句を「声聞くらむか」のように「現在」推量の形に訓むのは文脈上少し不自然で、必然的に「声聞きけむか」のように「過去」推量の形に訓まざるをえなくなる。すなわち、結句の原文を「片聞け我妹」と命令形に訓む限り、元暦校本に「監」とあるなしに関わらず、底本原文の「濫」を「監」に改訂せざるをえないのである。このことは、問題の原因が結句を「片聞け我妹」と命令形に訓むこと自体にあることを示唆している。この問題については後に考察する。

次に、2. 3節の講談社文庫（中西進）は、第四句の原文は底本と同じ「濫」としたままで「けむ」と訓んでいる。しかしこの訓み方はそもそも無理である。というのは、既に上で「濫」の用例に関する調査結果①から明らかのように、万葉集における「濫」の字はすべて例外なく「らむ」と訓まれており、「けむ」と訓まれた例は皆無だからである。また、「濫」の字が「らむ」と訓まれるのは、「濫」の字音が呉音・漢音ともに「ラン」であり、「らむ」の音に近いというそれなりの理由があるのに対して、「濫」が「けむ」と訓まれるべき理由はない。

日本古典文学大系（2. 4節）と萬葉集註釈（2. 5節）では、第四句を底本原文「音聞濫香」のまま

で素直に「声聞くらむか」と訓んでいる。ここでは「濫」が「らむ」と訓まれており、この点に関しては問題はない。問題があるのは、後に指摘するように、歌の解釈における不自然さである。

さて次に、結句「片聞吾妹」の訓読の問題と歌の解釈における整合性の問題について検討しよう。まず新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集から見ていくことにする（2. 1節と2. 2節を参照）。この二つの注釈書では、結句「片聞吾妹」はともに「片聞け吾妹」と命令形に訓まれ、歌全体の意味はそれぞれ次のように解されている。

秋の野の尾花の穂先に鳴くモズの声を聞いただろうか。よく聞きなさい、妻よ。

秋の野の 尾花の穂先に 鳴くモズの 声を聞いたかね ようくお聞きよおまえ

いずれもほとんど同じ内容である。ただ、後者では第四句「声聞きけむか」の「けむ」が無視されて訳出されておらず、厳密に言えば、「声を聞いたかね」ではなく、「声を聞いただろうかね」とすべきであろう。ともあれ、細かい点はさておき、上の二つの現代語訳を読むと、一見まともな日本語になっているように見えるけれども、内容的には深い「違和感」を感じざるを得ない。二つの現代語訳で「モズの声を聞いただろうか」というのは可能性としては自問の場合もありうるが、後に「よく聞きなさい、妻よ」という内容が続くところからすると、妹（妻）への質問と考えられる。だとすれば、この歌のように妹に質問をしておきながら、その回答がまだ来てもないのに、いきなり、「よく聞きなさい、妻よ」と言うのは不自然ではないだろうか。もしかしたら、妹はすでにモズの声をしっかり聞き終えているのかもしれないのである。もしそうであれば、「よく聞きなさい、妻よ」などと言えるはずがない。すなわち、「よく聞きなさい、妻よ」と強い口調で言えるのは、妹がまだモズの声を聞いてないか、あるいは聞いたとしても聞き方が不十分であることが「あらかじめ判明」している場合に限るのである。にも関わらず、この歌では歌の前半で「(あなたは)モズの声を聞いただろうか」と「質問」(あるいは「疑問」を呈)しているのである。果してこんな行動をとる人間がいるだろうか。しかも問題は、この文脈の不自然さだけにとどまらず、既に指摘した原文改訂の問題（「濫」を「監」へ改訂）が加わる。

次に、2. 3節の講談社文庫（中西進）の解釈について検討してみよう。

秋の野の尾花の先に鳴く百舌鳥の声は、さすがに聞いただろうか。私のいうことは半ばにしか聞かない吾妹よ。

この現代語訳にも問題がある。歌の前半の「百舌鳥の声はさすがに聞いただろうか」という疑問文の内容と後半の「私のいうことは半ばにしか聞かない吾妹よ」という内容の「つながり」がどうしてもピンと来ない。前半と後半のつながりの「必然性」が理解できないのである。この解釈はほかにも問題を含んでいる。この解釈では、結句「片聞我妹」の「片聞く」を「半ばにしか聞かない＝中途半端（不十分）に聞く」と解しているが、万葉集には「片待つ」という表現が8例あり、すべて「ひたすら待つ、一心に待つ」の意で用いられている（ただし異説もある）。したがって、これと語構成がまったく同じの「片聞く」の意味も「ひたすら聞く」である可能性がきわめて高いのである。実際、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集、万葉集註釈では「片聞く」をこの意味に解している。講談社文庫（中西進）の解釈は、以上の問題点のほかに、すでに指摘したように「濫」を「けむ」と訓むこと自体にそもそも無理がある。

次に、2. 4節の日本古典文学大系の解釈について検討しよう。

秋の野の尾花の先あたりで鳴く百舌鳥の声を、今頃聞いているであろうか。一人聞いている吾妹は。

この解釈には二つの問題点がある。一つは、上の現代語訳において、歌の前半の「百舌鳥の声を今頃聞いているであろうか」という疑問文と後半の「一人聞いている吾妹は」とのつながりが不自然なことである。歌の前半と後半のつながりの「必然性」が理解できない。もう一つは、結句「片聞く我妹」の「片聞く」を「一人で聞く」と解している点である。「片聞く」を「一人で聞く」と解する根拠に関連して、2. 4節の補注の中で、

片待つという動詞は、ひとり待つ意から、さらに、ひたすら待つ意へと移って行ったものとも考えられる。

と説明されているけれども、十分な説得力があるとは思えない。というのは、「ひたすら待つ」のは何も「一人で待つ」場合に限ったことではなく、二人あるいは三人以上で「ひらすら待つ」場合もしばしばあるからである。すでに述べたように、万葉集においては「片待つ」が「ひたすら待つ、一心に待つ」の意で用いられていることからすると、「片聞く」は「ひらすら聞く」と解するのがもっとも自然な解釈のように思われる。

最後に、2. 5節の万葉集註釈の解釈について検討しよう。

秋の野の、尾花の穂先に鳴く百舌鳥の声を聞いてゐる事であろうか。ひたすらに聞くがよい。

この解釈の問題点はすでに述べた新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集（2. 1節と2. 2節）の場合と基本的には同じである。唯一の違いは万葉集註釈では「百舌鳥の声聞くらむか」と現在推量「らむ」であるのに対して、新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集では過去推量「けむ」となっている点だけである。今の場合、「百舌鳥の声を聞いてゐる事であろうか」というのは作者による現在推量の疑問文であるが、過去推量にしる現在推量にしる、推量の疑問文ということは作者はまだ妻がモズの声に聞いたかどうか知らないわけで、もしかしたら妻は既にひたすら聞いた可能性もあるのに、どうしていきなり一方的に「ひたすらに聞くがよい」などと言えるのだろうか。このように言うのは、相手がまだ聞いてないか、あるいは聞き方が不十分であることをはっきり知っている場合に使う表現ではなからうか。

4. 新しい解釈の提案

前節で見てきたように、先行研究にはすべて何らかの問題点が含まれていることが明らかとなった。これらの問題点を解決するためには、2167番歌のもっとも重要なキーワードである「片聞く」の意味を正確に理解する必要がある。そこでまず「片聞く」という動詞の語源について考えてみよう。

私たちは、周りの雑音にうもれてかすかにしか聞えない音を全神経を集中して何とか聞こうとするとき、しばしば図に示すような仕草をする（Microsoft Office 2003のクリップアート図より転載）。すなわち、片耳のある方向に向け、片手を集音器のような形にして耳に当て、全神経を集中して「耳を澄まして」聞こうとする。このような行動は現在の私たちもときどき行なう行動であるから、おそらく万葉時代の人々も同じ行動をとったに違いない。万葉集の「片聞く」という行為はまさにこの行為を意味するのではなからうか。このように解釈すれば、「片聞く」が（「片待つ」の場合と同様に）なぜ「ひたすら聞く」という意味になるのかよく理解できるのである。

以上の観点に立って歌の内容を見直してみると、この歌の作者(男)は、妹が何かに向かって必死に片耳を澄まして聞いている様子を遠くから眺めて、あれは妹がモズの声を聞こうとしているのではないだろうか、と推測しながら、その時の心境を歌で表現したのであろう。もしそうだとすれば、歌の現代語訳は次のようになる。

秋の野の尾花の穂先に鳴くモズの声を聞いているのだろうか。
(何かに向かって片)耳を澄ましている我妹は。



ここでは、「声聞くらむか」は作者による現在推量の疑問文であるが、妹に対して質問しているのではなく、妹が何かに向かって片耳を澄ましているのを見て「我妹はモズの声を聞いているのだろうか」と自分自身に対して問いかけているものと思われる。この問いかけ内容の主部と述部を「倒置」したのが上の現代語訳(すなわち歌の文脈)にほかならない。

5. おわりに

この論文では、万葉集2167番歌の訓みと解釈について再検討を行なった。特に、従来から諸説があった原文の第四句「音聞濫香」と結句「片聞吾妹」について検討し、次の結論を得た。第一に、この歌の解釈の重要なポイントは「片聞く」という動詞の語義にあり、これは両方の耳で聞くと注意力が分散するためできるだけ効率よく聞き取るために片手を片耳にあてて集音器のはたらきをさせ全神経を集中させて聞くことを意味すること。第二に、この歌は作者(男)が、妹が何かに向かって必死に片耳を澄まして聞いている様子を遠くから眺めて、あれは妹がモズの声を聞こうとしているのではないだろうか、と推測している状況を実景として歌で表現したものであること。以上、本論文で示した解釈が適切なものであるかどうか多くの方々のご批判をおおぎたい。

6. 参考文献

- [1] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 505、2000年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 116、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注(二)」、中西進、講談社文庫、p. 370、1980年。
- [4] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 118-119、p. 464、1960年。
- [5] 「万葉集注釋 卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 364-365、1962年。